
魔法少女に会っちゃった場合+ ぶらす

作戦参謀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女に会っちゃった場合 + ぷらす

【Nコード】

N1283BA

【作者名】

作戦参謀

【あらすじ】

これは本編で報われなかったヒロイン達が、幸せ(?)を掴む物語集。本作は【魔法少女に会っちゃった場合】のIF編です。もしも主人公があのだヒロインを攻略したら(されたら)……というギャルゲー風IF物語集です。時系列もバラバラですが、一応本編から繋がるようにしております。 不定期更新です。

登場人物紹介（前書き）

どうも、始めましての方もそうでない方も、作戦参謀です！

本作はあらずじにも記載した通り、【魔法少女に会っちゃった場合】の「アガミ的ギャルゲー風IF物語集」です。

本編の流れが大体分かるようになっていたので、初見の人でも楽しめると思いますが、作者としては本編を読んでからこっちを読んだほうが楽しめるかなと思います。

今回は簡単な登場人物紹介です！

登場人物紹介

ふじしまけいすけ
・藤島圭介

身長172cm、体重59kg、8月生まれ。

県立初芝高校2年4組在籍。

本作の主人公。

体質的に体が丈夫で、B-29爆撃機の飛行高度から落下したり、トラックに跳ねられても生きているほどタフ。基本的には優しい性格だが、変態な上に喧嘩っ早い。その反面自虐的な所もあり、何かあると自分のせいだと落ち込んでしまう事も。

成績は赤点ギリギリレベル。体が丈夫である事と、ある事情からそこそこ喧嘩は強い。

きのしたくれは
・木下暮葉

身長146cm、体重37kg、6月生まれ。

県立初芝高校2年4組在籍。連邦特殊情報総局アルファ隊所属、特隊員。

【魔法少女に会った場合】本編のメインヒロイン。

サヴィエトに狙われている圭介を守るべく、異世界から派遣されてきた魔法少女。魔法少女と言っても魔法が使えるだけで、本人は刀を用いた白兵戦を得意としている。俗に言うアホの子で、性格は明朗快活で人懐っこい。小柄で小動物のような愛嬌を持っている為、人には好かれるタイプ。

何事にも真面目だが、気になる人にはヤキモチを焼く一面も。

くにむねいぶき
・国宗伊吹

身長151cm、体重40kg、7月生まれ。

県立初芝高校2年4組在籍。

本作のヒロインの一人で圭介の幼馴染。

気が強く素直ではないが、何だかんだ言って圭介ベツタリ。かつてはとても素直で元気な子だったらしいが、とある一件以降、現在のように強気に振る舞う様になったらしい。見た目が可愛いから男子にはチャホヤされ、圭介以外には普通の人なので女子にも好かれ、友達が多い。

ただし恋愛に関してはその性格が災いし、中々前進しない。

朝圭介を起こしに行ったり、圭介と一緒に登校するのはさりげないアピールなんだとか。

あけちなぎさ
・明智凧紗

身長165cm、体重48kg、9月生まれ。

県立初芝高校2年3組在籍。

本作のヒロインの一人で、春に転校してきた超能力者の少女。

普段は容姿端麗、頭脳明晰で真面目な風紀委員であり、教師からも一目置かれる存在だが、実は戦い方次第で圭介を一方的にボコれるほどの身体能力と、バイロキネシス発火能力という能力が使える。かつては佐井

学園という、表面上は進学校で通っている場所に通っていたらしい。風紀委員という役職と、人によっては厳しそうに感じるが、実際

は義理堅く人情厚くて優しい性格の持ち主。それ故に女子からもモテるらしいが……？

曲がった事が嫌いで、堂々とした熱い男が好みのタイプ。実はとある戦国武将の子孫。

・青山千早
あおやまちはや

身長157cm、体重45kg、11月生まれ。

県立初芝高校1年3組在籍。

本作のヒロインの一人で、圭介の後輩。

写真部に所属しており、将来は写真家になりたいと言う夢を持っている。控えめな性格だが、心優しい純粋な子である為、何かと友達には愛されている。しかも控えめな性格のわりには発言がストリートであり、浅間部長を罵る時は圭介以上にキレがよい。

圭介に関するところある事情を知っている。実家は市内でも有名な由緒正しき旧家。

・浅間あかり
あさま

身長145cm、体重38kg、4月生まれ。

県立初芝高校1年3組在籍。

本作のヒロインの一人で、圭介の後輩。

千早とは対照的な性格で、少し男勝りで喧嘩っ早い所がある。圭介の悪い噂を聞き、彼を成敗しようとするなど単純馬鹿ではあるが、根は善良で正義感が強い。女版圭介とも捉えられる。

家庭の事情でかなり厳しい生活を送っているが、その時の一件で

圭介に対する認識を改め、今は彼の事を敵視していない様子………
…なのだが？

・ふじしまあおい
藤島葵

身長155cm、体重44kg、5月生まれ。

県立初芝高校1年3組在籍。

本作のヒロインの一人で、圭介の妹。

見た目通り人見知りなどは一切しない社交的な性格であり、交友関係も広く良好で、学力は学年どころか学校全体でも三本指に入る優等生。兄とは対照的な存在だが、大のお兄ちゃんっ子でその愛情はもはや異常なレベルに達している。

前述の通り優等生で、彼女を知らない人にはガリ勉っぽいイメージを持たれるが、実は護身術を習っており不良一人程度なら倒せたり、勉強は出来るけど肝心な所ではアホだったり、行き過ぎてるくらい変態だったり、中身は兄貴そっくりである。

趣味は兄の観察。特技は兄の秘密調べ。料理が壊滅的に下手。ヤンデレの素質あり。

・はやかわゆう
早川悠

佐井学園在籍（書類上、本人は退学志望）

身長168センチ、体重不明（軽い）、生年月日不明（一応高校生）。

【魔法少女に会っちゃった場合】の主人公格の一人で、【最強】の名を持つ超能力者。

白い肌に白髪に赤い瞳とアルビノ的な見た目をしており、その上華奢な体格である為、一見弱そうに見えるが【エアオペレーション大気操作】という能力を有している。

風や気圧の操作、風を利用した飛行、分子運動操作、酸素濃度の上下や、風や空気を利用をした【反射】や【防御】が出来るなど、大変チートな能力の持ち主。しかし、あまりにも過酷な現実を見て来たせいか気がふれており、人格は破綻寸前。

顔は整ってお、普段はクールでイケメンだが、戦闘時などは狂ったように人が変わり、虐殺的な笑みを浮かべたり、とても人がする事には思えないほど残酷な戦い方を好む傾向がある。

本作でも様々なルートに絡んで……くるかも。

・小坂亜紀こさかあき

県立初芝高校2年4組在籍。

身長162cm、体重49kg、10月生まれ。

圭介や伊吹のクラスメイト。

ぶっきらぼうな姉御口調で話し、かなりアバウトであるが一応クラス委員。恋愛関係のニヤニヤ話が好きらしく、いつも伊吹を圭介絡みの話でいじっている。また、戦国オタという設定があったが、あまりその設定が生かされた事はない。

とある事情で圭介から感謝されている。スタイル抜群で風紗に劣らぬ巨乳。

・長宗我部大吾ちようそがべだいご

県立初芝高校2年4組在籍。

身長171cm、体重60kg、7月生まれ。

圭介の悪友。

おちゃらけた性格で我欲に素直な男で、圭介ですら引くほどの変態。しかし現実の女子には全く興味がなく、完全二次元派であり自称「ギャルゲーの神」。

しかし、落とし神の域には達していない。

人柄によらず成績は優秀だが、校則を余裕で破ったりと教師からは問題児扱いされている。

け おんの平沢唯を愛して止まない、かわ唯がモットーな男でもある。

・重原広敏
しげはひろとし

県立初芝高校2年4組在籍。

身長180cm、体重70kg、4月生まれ。

圭介の悪友。

身長が高く筋肉ながら爽やかな男で、その上イケメンなので女子にはモテる。しかし実家は【無差別格闘重原流】の道場であり、本人も重原流武術の使い手。その為今は武に励む事にしており、恋愛にはそれほど興味が無い様子。

実力は高く、不良数十人を一度に相手にする事が出来る……もはや漫画級の強さ。

圭介達とオタク談義に花を咲かせる半面、音楽趣味が小坂と一致しており、2人で話をしたりCDの貸し借りを行っていたりと、もしかするとお似合いの2人なのかもしれない。

登場人物紹介（後書き）

次回から本編。

最初は圭介の妹・葵ルートから描いていこうと思います！

突然の居候（前書き）

どうも、作戦参謀です！

今回から葵ルート、開幕です！

時系列的には本編第7話後から開始です。

突然の居候

「……と、いうわけで　よろしく願いします!」

悪夢だ、俺は今　悪夢を見ている。

先に言っておくが、俺は普通の人間……だと思っていたんだ。名前は藤島圭介、髪も黒で体格も至って普通の高校生だ。少しばかり体が頑丈だったりするが、それ以外は勉強が出来るわけでもないし、魔法が使えるわけでも喧嘩が強いわけでもない。

本当に何処にでもいそうな、才能の【さ】の字すらないしがな
高校生……のハズなんだ。

しかし。

そんな幻想は、俺の前でニコニコしている少女に　跡形もなく
ぶち殺されてしまった。

きのしたくれは

木下暮葉。

小動物チックな小柄な体躯。琥珀のように美しい瞳。小さな桜色の唇に、桃色の日本人離れしたセミロングヘア。何処を見ても可愛らしい美少女だが、服の上から推測するに胸は残念である。

まあ、正直口りもいいよね。俺は美乳派だが……正直口りも好きだ。

「あの、けーすけ様つ。どうかされました?」

「いや、なんでもねえよ……はあ」

「ねえ、あんたさっきからずっとそんな調子だけど……大丈夫なの?」

この場には暮葉の他にも、もう一人女の子がいる。ソイツとは昔からの幼馴染で、とある一件以降なんと言えはいいのか……俺に厳しくなってしまったのだが、何だかんだ言っても隣にいて、何気なかった日常を今まで一緒に過ごしてきたヤツである。

くにむねいぶき
国宗伊吹。

コイツもまた暮葉に劣らぬ美少女だ。

ほんの少しだけ青みがかった銀髪ショートヘアと、ツンとした紅い瞳。そして口を開ければ八重歯が目立つのが特徴的だ。学校でも相当モテるらしいが……告白は全て断っているらしい。

まあ、コイツの場合は仕方ねえかもな……。

「ねえってば」

「えっ?」

「えっ、じゃないわよ。私の事華麗にスルーしまくってんじゃないわよ」

「悪い……はあ」

「けーすけ様……やっぱりサヴィエトの事、気にされているのですよ
うか?」

「あんな話いきなり突きつけられたら、いくら馬鹿なアイツでも傷つくっつーの」

そう、あんな話^{いゝ}が原因である。

だから俺、さっきから妙にテンションが低いのだ。

もちろん普段は違うぞ。もっと明るく、騒がしいごく普通の高校

生なんだからな。

っで、俺が何で落ち込んでいるかつーと、さつき暮葉から話された事なんだが……どうも俺って日本人じゃないらしいのよね。その正体はアレクサンドルってヤツの子孫。帝国の皇太子で、その帝国自体は随分前のクーデターで倒されたらしいが、ソイツは皇族で唯一の生き残りらしい。

革命派の弾圧から異世界へ逃れ、苦勞して日本国籍を取得し、現在その子孫である藤島家、つまり俺や俺の家族が平和に過ごしているという。

しかし、そんな子孫の中でも一番血が濃いらしい俺を狙い、異世界から封印されたハズのかつて異世界の国、ロジーナを手に入れ圧政を布いていた通称【サヴィエト】の指導者が、どうも俺達が住む世界になだれ込んで来て大暴れしているらしいのだ。

正直事実だとは思いたくないし、聞いた今でも信じられない。

ところがさつき、【サヴィエト】所属の変な狼野郎に襲われたのだ。

それは 暮葉の話が事実である証拠だ。

「この歳で社会に出るよりも厳しい試練しれんを与えられるなんて……ああもう！ 不幸だ！」

やってられるかちくしょう……いつ拉致られるかわからねえじゃないか。しかもサヴィエトってなんて言うか……魔法使いと呼ばれる、魔法を扱う者を集めて赤軍を結成し、その数は今や3万を超えているという。3万人の魔法使いが俺の相手だぜ……勝てるわけねーだろ。

クソッ、こんな事なら もっと沢山エロゲーを買っておくべきだった！

「や、やっぱりけーすけ様！ 相当気にしているみたいなのですっ

「!?」

「アイツ、意外とメンタル弱かったのね……」

「ううゝ申し訳ないのです、けーすけ様あゝっ!」

「はあ……ほんと、アイツも不憫ふびんよね……っ」

そんなこんなで、俺は泣きそうになりながら三人で帰路についたのだった……。

……それから数十分後。

「ただいまー」

「ただいま戻りました!」

「葵ちゃん、お邪魔するね」

俺達3人は我が家、つまり藤島家のドアを開け、帰りの挨拶をする。すると、居間のほうからドタバタという物音が響き、数メートル先にあるドアが勢いよく開けられた。

「2人ともおかえりっ!」

元氣よく飛び出してきた少女。ショートのを髪を左で結び、そこから一房の髪が伸びているいかにも活発そうな少女は、これまた不思議な事に髪色が水色であった。しかし染めているわけではなく、天然のものらしい。確かに小さい頃からこの色だったよな……というか、お袋と同じ色である。

そんな不思議な髪には二つの小さな鈴があり、そこからは黄色いリボンが靡^{なび}いている。

子猫のような愛らしさを持つ少女の名は葵^{あおい}、俺の妹である。

外見は似ていないが、中身は似ているとよく言われる俺達2人……
……なんだか不思議だぜ。

「あれっ？ 今日はお姉ちゃんも一緒？」

俺と伊吹が幼馴染ならば、歳が俺達と1コしか離れていない葵も、当然伊吹の幼馴染。昔は3人でよく遊んでいたし、コイツも伊吹の事をお姉ちゃんと呼ぶほど慕^{した}っている。

「あ、うん。たまには葵ちゃんと一緒に過ごすのもいいかなって」

「またまた〜お姉ちゃんったら。そう言ってお兄ちゃん目当てなんだよね？」

「ち、違っわよ！ ああああつ、あんな馬鹿……興味ないからっ！」

グサツ、と来たぜ伊吹さんよ……まあわかってたけどさ。しっかし伊吹もまあ……アレだ、中々デレないよなあ。計画的にフラグ建設してるってのに……もう伊吹ルートは諦めようかな？

まっ、それでも伊吹をからかうのは面白いし、

「お兄ちゃんを狙うのはいいけど、でも付き合っちゃダメなんだよ？」

「い、言われなくてもこんな奴 頼まれなかったら付き合わないわよー！」

「頼んだら付き合ってくれるのかよ!？」

「……ッ!? て、訂正! 頼まれてもぜえったい付き合わない!」

まあ、わかってたけどさ……でもまあ、別にそれでもいいか。考えてみると幼馴染という関係が崩れたら、今まで通りには出来ないんだよな。進展するか嫌われるかは別にして、俺は今の空気が好きだからなあ……やっぱり、伊吹は幼馴染のままのほうがいいな。

「にゅふふっ、葵さんはけーすけ様がお好きなのですね」

「うん、葵はお兄ちゃんが大好きなんだよ!」

「ほんと、葵ちゃんってお兄ちゃんっ子よね。こんな兄貴なのに……」

「こんな兄貴なのにとってどどういう意味だよ!？」

伊吹め……物凄く失礼な事言いやがって。確かに俺、人として終わってるけどさ……。

「にゅふふっ、仲睦^{なかむつ}まじい兄妹ですね!」

「コイツの場合は仲睦まじいを通り越してエロ睦まじいだ……」

「ひ、ひどい!? エロは悪くないよ!？」

「突っ込み所そこかよ!」

「当たり前だよ！ 葵はね、恋愛なんて別に階段はないと思ってるんだよ！？ さあ、ばあーちこんお兄ちゃん！ 葵はいつでも準備出来てるよ。無理やり膜突き破りのレ プでも大歓迎だよ！」

「おいコラッ！ 女の子が膜を破るだのレ プだの、はしたない事言うんじゃないよ！」

「っーかきわどい下ネタだな……いくら変態の俺でも流石に引くわ。そりゃあね、俺だって男だから変態だよ。THE・変態紳士だよ。だけどただのエロと面白いエロは違うんだぜ？」

「あんたら……相変わらず変態ね」

「もしかして拙者、物凄い人達と同居する事になっちゃいました？」

「頑張つてね木下さん。この2人は慣れないと正直付き合ってけないわよ？」

「だ、大丈夫なのです！ その……ある程度は耐性ありますのでっ！」

「そ、そう……っ」

「あつ、あと拙者の事は暮葉でいいですよ？」

「えっ、そう？ じゃあ……暮葉」

「はい！」

あつちはあつちで仲良くなってるし……まっ、あれはいい事だな。

出来れば受け入れられなかった現実だけど、こうして見ると暮葉も普通の女の子っぽいし。まあ刀持ってるし強いし、オマケに魔法も使えて、しかも魔法を使うと滅茶苦茶な事になるけど……それ以外は至って普通だ。

サヴィエトにさえ気をつけてればいい……のかな？

とりあえず、俺に言える事は一つだけだ。

それはこれから先　日常が賑^{にぎ}やかになりそうだって事だ。

藤島葵 Side

「はあ〜っ」

いい湯だなあ……。

今日はお兄ちゃんといっぱい話して楽しかったし、クーにゃんも一緒に住む事になったし、お姉ちゃんも今日は葵達と一緒に晩御飯を食べてくれたし、楽しかったけど疲れちゃったかも。

だけど、楽しい事だったから　疲れもすぐに吹き飛びそうだよ。

「……お姉ちゃんとクーにゃん、かあ」

今日は楽しかった反面、葵の中で不安が募^つった日でもあった。だって、クーにゃんとお兄ちゃん、会ってから時間が経っていないはずなのに、とっても仲良さそうだった……。

お姉ちゃんがお兄ちゃんに惚れているのは確実。きっと葵と同じ事を考えているはずだよ。

クーにゃんにお兄ちゃんを盗られるんじゃないかってね。

もちろん葵だって警戒しているよ。今はまだ仲のいいお友達程度かもしれないけど、お兄ちゃんって地味にモテるし……きつとクーにゃんもそのうち、お兄ちゃんの毒牙に犯されるかも。

お姉ちゃんだって考えている事は葵と同じ。ひよつとしたら今回の件で、お姉ちゃんがお兄ちゃんのハートをゲットする為に一肌脱ぐかもしれない。お姉ちゃんは気が強くて素直じゃないけど、行動力だけは半端じゃないし……お姉ちゃん、ある意味今までより危険な存在になっちゃうかも。

あつ、そうだ。葵の友達にお兄ちゃんの事好きって言ってる子がいた。その子はお嬢様だしお兄ちゃんとは釣り合わないとは思っけど、でも見た目は可愛いから要警戒だよ。

どうしよう、お兄ちゃん……モテモテすぎるよ。

このままじゃ、葵のお兄ちゃんが誰かに盗られちゃうよ。

お兄ちゃんも惚れっぽい人から、余計に大ピンチだよ……っ。

「うっうっお兄ちゃんが大変だよ大ピンチだよどうしよう……」

……あっ！」

そうだ！ 葵ったら……なんでもっと早く気付かなかったんだろっ？

普通好きなに何をするって……そんなの、人類が誕生した時から決まってるよね。

……恋愛は早い者勝ち。

お兄ちゃんを早くゲットすれば葵の勝利。

きつとお兄ちゃん、葵がもっとアピールすれば 振り向いてくれるよね？

確かにお兄ちゃんは実の兄……それは大きな障害かもしれないし、

社会的にいけない事だつて自覚はしているつもりだけど……でも、それを乗り越えてこそ 真の恋愛だと思うんだよ。恋に法は関係ない。葵はそう思ってるんだよ。

「につししっ！ 待っててね、お兄ちゃん！」

兄と妹と結婚する。

兄は童貞を妹に捧げる。

兄は妹を愛さなければならぬ。

これ、ぜえくんぶ葵の中の法律で決まってるんだよ？

だからお兄ちゃん 覚悟していてね？

兄が好きなんですよ

疲れた……とても疲れた一日だった。

風呂上がり、俺はエロゲーをやりながら、ふとそんな事を思っていた。

今日一日だけで随分と日常が変わってしまった気がするよ。変なヤツには襲われるし、俺が普通の人間じゃないって事がハッキリしてしまった。何より……女の子の居候が現れた。

これが美乳のお姉さんならなあ……いや、暮葉も十分需要があるぜ。何も女の子はおっぱいの大きさじゃない。むしろ小さいからいいって事もあるじゃねえかよ。

って……何考えてんだろう俺。

これじゃただの変態じゃねえかよ……。

しかし、俺もごく普通の健全な男子高校生だ。性欲くらいあったっておかしくはない。むしろ一瞬もエロい妄想をしないヤツの神経を疑うぜ。だが、俺はそれでも現実と空想の境目をわきまえている変態紳士なのだ。決して犯罪じみた事はしないし、ただ妄想して興奮して終わらせるだけだ。

それが真の紳士という者だろう。

如何なる時も冷静であれ。そして妄想する時はシチュエーションすらも、完璧に妄想し自己満足するべし。何より、現実の女子には決して犯罪じみた事をしてはいけない。

これが 紳士の必須条件だぜ。

人に嫌われたくは無いから、表向きは真面目な人間を装っておく。しかし、人間の本质とは表面上の姿からは想像しにくい。例えばいかにも清纯そうな女の子が、実は男性関係にやたらとだらしなかつたり、いかにもビッチそうな女の子が、実は滅茶苦茶初心^{うぶ}だったり

……全てありえる話だ。

つまり、上っ面^{うわづら}なんて いくらでも誤魔化せるんだよ。

だからこそ俺は変態を隠すぜ……そして、俺は 変態王になる！

「……………何考えてんだろ、俺？」

……時々あるよね。

自分が考えている事があまりにも馬鹿馬鹿しくなって、急にテンションが下がる事……。

はあ……エロゲーでもやってから寝ようかな。

それから数時間後。今日は見たいアニメの放送日でもないのと、とりあえず画面の中にいる嫁の好感度を上げた後、気がつけばもう1時になっていたので俺は寝る事にした。

部屋の灯りを消し、布団の中に入るとしみじみ思う事があった……。

最近、エロゲーやってから寝る事が多いんだけどさ……高校生でこの生活ってどうよ？

まず俺は18歳ですらないし、普通ならエロゲーやっちゃダメな年なんだよねえ。まあ、アゾンで年齢偽ればエロゲーなんて簡単に入手できるけどさ。でも時々思うんだよ……。

こんな事はつかしてるから モテないんだよねえってさ。

思えば3度の失恋……全部先に男がいたパターンなんだよな。それに懲りて二次元に走り、とりあえず画面の中の嫁で今までは満足していたけど……ああ、やっぱり彼女欲しいよなあ。クラスの連中にも男だの女だのが出来て……ちくしょう。どいつもこいつもリア充しやがってえ。

俺だってな、リア充したいですよ。誰かと一緒にクリスマス過ご

したいですよ。それが現実画面の前で寂しくケーキ食いながらエロゲー……もうクリスマスというよりクルシミマスだよ。

「ああ……出会いが欲しい」

今日、女の子とは出会ったけどさ……あまりにもインパクトが強すぎるっつーか。その、暮葉はあれなんだよなあ……刀持ってるし、登場があまりにも電波で、ずきゅんと胸に來なかつた……。

伊吹は今の関係のままのほうが俺としては安心だし。

クラスメイトである、友達でもある小坂はなあ……なんっつーか、もう友達ってポジションが定着しちゃってさ、そういう感情が沸かないんだよねえ。

かと言つて他の女子とは仲がいいわけじゃないし、事務的な会話しかないし……。

「あゝあ、誰か俺のこと想い慕ってる可愛い子とかいねえかなあ……」

……あゝ、なんか虚しくなってきたし……寝るか。

布団の中に包まり、まぶた瞼を閉じると……やがて、意識が薄れていき

……。

がさごそ。

「……ん、んっ？」

もう朝……って、部屋は真っ暗だけな。

物音が聞こえたから、葵か暮葉が起きたものだと思つたが……違うみたいだな。ベットの近くに置いてある目覚まし時計は、現在時刻が3時50分である事を示している。確かに、夏ならこの時間帯

でも明るいだろ？……今は春だ。4時になったって暗いモンである。

だけど、さっきの物音はなんだったんだろうか……気になるっちゃあ気になるが。

ぶつちやけ、確認するのも面倒だし、多分気のせいだから寝ちやおうかな……。

俺は再び布団に包まり、ゆっくりと^{まぶた}瞼を閉じた。

「……っ？」

……のだが、どうも体に違和感を覚えてしまったので、俺は再び^{まぶた}瞼を開ける。流石に天井には何もいない。むしろ何かいたら叫びますよ……しかしなんだ、重たいと言うか……。

何か、体が……これって所謂^{いわゆる}金縛りというヤツなのでは？

「あつ、起きちゃった？」

突然、聞こえるハズのない女の子の声が聞こえてきた。やはりこれは^{かなしば}金縛りというヤツなのだろう。しかし変だな……手足と首はちゃんと動くぞ？

^{かなしば}金縛りつたら普通全身固定、あるいは指先が僅かに動く程度なんだけど……。

あれ、なんか……おかしい？

「おはよう、お兄ちゃん」

マウントポジション。

ああ向けになった相手の腰を両足で抱え込むようにし、馬乗りになる事の格闘技用語。

喧嘩や試合でポジションを相手に取られれば、間違いなくこちら

が不利だ。下手したら一方的にボコられてしまいかもしれない……
が、女の子に取られると何となくエロい気分になれる。敗北感が溢
れるハズなのに、でも女の子の場合は興奮してしまう不思議な体勢
である。

そして今、信じられない事に俺は 女の子に馬乗りされている
わけだが、

「葵？ 何やってんだよ、そんな所で？」

「えっ？ うーん……強いて言うならば夜間プロレスこつこだよ！」

「なんだよ夜間プロレスって！？ 激戦エロススティックな香りがす
るんですが！？」

「んーっと。多分、お兄ちゃんが考えている事で合ってると思うよ
？」

マジですか……じゃあ我が残念な妹である葵は、誠に残念ながら
兄を夜這いしにきたと？

いつもの、寝る時に来ている淡い水色のパジャマ姿の葵。

ニコニコしながら、俺の上に乗って俺の事を見下ろしているが……

…。

「一応言っとくけど、まだ3時代だぜ？ ゲームしたいんなら明日
まで待てよ」

「ゲームもいいんだけど、たまにはお兄ちゃんと遊ぶのも……っ」

「いつも遊んでるだろ。つか、遊びたいのも明日まで待ってくれ」

それまでに、妹ルートを全力で回避する選択肢を探しだすからさ。シスコンには喜ばしいシチュエーションだが、俺は至って普通のお兄さんだ。妹は好きだがそういう目では見れんのよ。

ただし、二次元を除く……二次元の妹は可愛いよね。

「ダメだよお兄ちゃん。夜じゃないと雰囲気出ないよ?」

「ですよー」

マジで何考えてんだ我が妹は。

いや、葵に襲われるのは初めてじゃないが……ここまで大胆な攻めは始めてである。

「あのさあ葵……まさか、今日はガチなのか?」

「うんっ! だってお兄ちゃん……彼女欲しいんだよね?」

なんでそんな事知ってたんだよ。確かに寝る前に声に出して言ったような気もするが……つか、コイツは俺の心を読む能力でも持っているのか?

とにかく葵さんマジで怖いっすよ。我が妹ながら手強い相手だ。

「欲しいっつか、そりゃ普通だろ? 男ならな」

とりあえず、この場は無難な回答をして逃れるとしよう。周りの奴らがそうなんだから、少なくともその理論は殆どのヤツに当てはまるハズだ。女子だって男が欲しいと思っているしな。

「そうだよな? だから、葵がお兄ちゃんの彼女になろうかなと思っただよ!」

「いい事を教えてやろう。俺にヨスガる趣味はないぞ?」

「でも、ゲームで妹キャラ攻略してたよね?」

「うっ……」

「佐奈かわいいよ佐奈。俺も佐奈に兄さんって呼ばれたいぜっ！
って言ってたよね?」

「……………」

なんか葵が怖くなってきた。

確かにそんな事言った記憶はあるけどさ……………なんでコイツが知ってんの?

「それに、なんで美也が攻略できないの? 俺もにいにつて呼ばれたい! って言ってたよね?」

「……………」

否定できないのが悲しいぜ…………クソッ、俺は肝心な事を忘れていた。葵は兄貴限定のストーキングシスター。略してスト妹だった事をな。

ちくしょう、ア ガミなんて家でやるモンじゃねえな。

かと言って学校はPNP持ち込み禁止だし。いや、大吾は普通に持ち込んでるけど…………。

「それって、お兄ちゃんがシスコンって証拠じゃないかな?」

「合ってるような間違ってるような……」

まずこの時点で馬鹿でしょ俺、ここは否定しとけよ。
否定できなかったとか……とんだけ甘いんだよ俺。

「だから、お兄ちゃんは葵の事好きなんだよね？」

「そりゃあ……好き」

「ホント！？ やったあ！ じゃあ今から葵といっっぱいエッチな
事しようね！」

「テメエ！ 人の話は最後まで聞きやがれ！ つか、女の子がエッ
チとか言っくんじゃありません！」

こんな変態なのに、今まで男を家に連れ込んだ事がないのが不思議だ……。葵、そこまで徹底したブラコンだったとは。正直尊敬に値するけど、兄としてはありがた迷惑だぞ？

「えっ？ お兄ちゃん……もしかし控えめな子が好み？」

「そういう問題じゃねえって」

「じゃあエッチしよ」

コイツの頭の中には好きな人「エッチしかねえのかよ。

今はまだその対象が兄で、俺の理性が働いているからいいとして……そのうち、コイツも俺から離れて誰かと付き合う事になるんだろ。だけど、そんな変態思考でいいのか？

なんつーか、葵ってビッチ予備軍っつーか……やり逃げされそう

なタイプだよな。

兄として放っておけねえっつか……一度再教育したほうがいいっつか。

……ダメだ、俺まで変態思考になって来た気が　　って俺は元から変態か。

とにかくこのままじゃダメだ。そう思い、本気で妹の将来が心配になってきた俺は　　、

「お前さ、すぐ俺にエロい事しようぜって言うてくるけど、そういう事は言わない方がいいと思うぞ?」

「えっ?　なんで?」

「なんでって……相手が俺だからまだしも、世の中悪いヤツがいっぱいいるんだぞ?」

「大丈夫だよ!　葵はお兄ちゃん以外の男の人は、むしろ追っ払うタイプなんだよ?」

「だからって、お前の即エロな考え方はどうかと思うぞ?」

俺だって女の子と一度はしてみたいと思うさ。けどねえ、一応順序ってモンがあるでしょ?

エロゲーだと今の俺と葵みたいな、こういうシチュエーションから始まる恋もあるけどさ。

「……じゃあ、どうすればいいの?」

「どうすればって……普通デートとかを先にしないか?」

「そっか……そうだよ。うん、葵もその通りだと思うよ！」

お前、さっきまで俺に夜這いしようとしてたじゃん……。

「とにかく、色仕掛けは自重したほうがいいぞ？俺ならともかく、俺以外の男に色仕掛けしたら泣かされるかもしれないぞ？」

「……えへへっ。お兄ちゃんって何だかんだ言っただけの事、心配してくれるんだね」

何故だか突然照れ笑いをし始めた葵が、嬉しそうに顔を近づけ、俺にそう言ってきたのだ。

「あのなあ、家族を心配すんのは当たり前だろ？」

「うんっ、そんなお兄ちゃんだから　　葵はお兄ちゃんのこと好きになったんだと思う」

「な、なに言ってたんだ……お前？」

一瞬、かあつと顔が熱くなったような気がした。心臓も一瞬どくん、と少し鼓動が強まったような気がした。あれ、おかしいぞ……なんか恥ずかしいっつーか、妙にくすぐったかったっつーか……なんで俺が葵なんかの言葉で照れなきゃいけないんだよ？

「葵だってね、強引な人は嫌だよ？　お兄ちゃんは変態だし、顔も普通かもだけど」

「悪かったなイケメンじゃなくて！」

どうせ世の中は「ただしイケメンに限る」で動いてますよ。ちくしょう、なんでイケメンばっか優遇されるんだよ。それと、変態なのは葵もたるオが……ったく。

「でもね、うまく言葉で表現できないけど……一緒にいて一番安心できるんだよっ」

「か、家族だから……じゃねえのか？」

なんだよ、何か今日の俺変だぜ……。
いつもなら素っ気なく葵を追っ払えるってのに……。

「それもあるよ。でも葵はね、お兄ちゃんといるとドキドキするし、ムラムラもするよ？」

「ムラムラは余計じゃ！」

「だって事実なんだもん！とにかく、葵はいつものお兄ちゃんが好きなの！うまく言えないけど、でもお兄ちゃんが大好きなんだよっ！」

ほんと、成績は学内3位の優等生の癖に、肝心な所では馬鹿だよな……コイツ。そこがまあ葵らしいっちゃ葵らしいし、むしろ完璧超人じゃないからこそ安心できるんだけど……。

って、アレ？　なんで俺まで安心してるとんだ？

むしろ俺は葵に狙われていて、貞操の危機に直面してるハズなのに。

「お兄ちゃん、明後日……いや、正確には明日だけど、暇？」

「明後日かぁ……用事とかはねえけど、さ」

「本当は今日にしたかったけど、でも葵……友達と遊ぶ約束してるから　だから明日どこか遊びに行こう？」

明日遊びに行くって……これって、どう考えてもデートの誘いだよな。どうする、別に妹と遊びに行くこと自体は変じゃないか。いや、この歳になって妹と2人で遊ぶのは流石に変か。でも、なんだろうこの断りづらい空気は。断ろうとしても、言葉が喉を通らない。結局何も伝えられない。

おかしいな……俺ってここまでチキンな男だったか？

普通なら断るべきなんだろうけど……ちくしょう、断れねえ。

しかも相手は葵だ、断ったら本当に強硬手段に出るかもしれない。

「……勝手にしろ」

「そ、それってOK……なんだよね？」

「別に、遊ぶこと自体は変じゃねえからな……」

「………うん！　葵、楽しみにしてるね！　おやすみっ、お兄ちゃん！」

葵は喜んでいた。あんなに輝かしい笑顔を見たのは、かなり久しぶりかもしれない。そんな上機嫌の葵は夜中であるにも拘わらず、大はしゃぎしながら俺の部屋から出ていった。ボタン、と。嬉しさのあまりドアの閉め方が乱暴だったが、葵らしいと言えば葵らしい……。

しかし、俺も甘いな……断ればよかったのに。
まあ、一回遊んでやれば葵の気も済むだろう……多分。

兄が好きなんですよ（後書き）

・後書きトークコーナー

圭介「この作者ってさ、計画性皆無な詐欺師だよね」

葵「なんで？」

圭介「6時に更新すると言いつつ、もう7時だぞ？」

葵「作者曰く、予想外に話が長くなってらしいけど……」

圭介「それも想定して3時間前から書き始めるよ……全く」

葵「プロット組んでも結局悩みながら書くんだよね」

圭介「……お前、さつきから作者擁護しすぎだろ。お前まさか作者か？」

葵「違うよ！？　だって擁護してくれたらら出番増やすって作者が」

圭介「作者アアアア！　テメエは嫌なプロダクション社長かアアアアア！」

「ごめんなさい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1283ba/>

魔法少女に会っちゃった場合+ ぷらす

2012年1月8日19時54分発行